慶應義塾大学学術情報リポジトリ

Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	ウッドロー・ウィルソンの国家再生: 南北戦争の解釈から南部政治の復権へ
Sub Title	"What it costs to make a nation" : Woodrow Wilson's ideas of reunion and national renewal
Author	奥田, 暁代(Okuda, Akiyo)
Publisher	慶應義塾大学法学研究会
Publication	2015
year	
Jtitle	教養論叢 (Kyoyo-ronso). No.136 (2015. 2) ,p.87- 110
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	論説
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koaraid=AN00062752-00000136-0087

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

ウッドロー・ウィルソンの国家再生──南北戦争の解釈から南部政治の復権へ──

奥 田 暁 代

1. はじめに

1913 年、南北戦争の激戦地であったゲティスバーグに於いて 50 周年の記念式典が開催された。元南軍と元北軍の兵士の「再会 (reunion)」と位置づけられた式典で、ウッドロー・ウィルソン大統領は 50 年の月日を経て南北が和解したことを強調する演説をし、国家の発展を語った。

6月29日から7月4日にかけてのこの催しには、5万人を超える元兵士が集結している。これほど大規模な集まりだったが、ウィルソンは参加に乗り気ではなかったようだ。すでにワシントンを離れていた妻に宛てた手紙では、残念ながらまだ合流できない、やむをえず式典に出席することにした、と綴っている。休暇を優先させ一度は出席を断ったものの、周囲から50周年がいかに重要であるか説得され急きょ参加することにしたのだった(Papers of Woodrow Wilson 28:11)。

連邦と南部連合国両方の退役軍人を前に、"We are made by these tragic, epic things to know what it costs to make a nation—the blood and sacrifice of multitudes of unknown men lifted to a great stature in the view of all generations by knowing no limit to their manly willingness to serve"と述べ、多くの犠牲があったからこそ現在の国家が実現できたのだと説いた(Papers of Woodrow Wilson 28: 24)。そしてスピーチの最後は、過去にとどまるのではなく未来に向かって共に行動を起こそう、という呼びかけで終わっている(Papers of Woodrow Wilson 28: 25)。聴衆を鼓舞するような印象の演説だが、受けはいまひとつだった。翌日の『ニューヨーク・タイムズ』紙は、スピーチを聞いた1万人の退役兵らは感動した様子もなく、「ほか

の場所ならともかくゲティスバーグにはふさわしくない」と不平を漏らす者もいたと報じている("Gettysburg Cold to Wilson's Speech")。戦争やそれぞれの戦いについてはいっさい言及しない、ウィルソン特有の漠然とした演説は、退役将兵の集う記念式典には馴染まなかったと考えられる。また、新聞には大統領がゲティスバーグに 46 分間しかとどまらず、演説後すぐに家族が待つニューヨークに向かった、ということも付け加えられていた。

このような元兵士をたたえる式典は、多くの歴史家が指摘するように、とくに南部人にとって特別な意味を持っていた。例えば、Gaines M. Foster は著書 Ghosts of the Confederacy において、"The orators and monuments testified to their importance, to their heroism, to their honor. If they went to a reunion, huge crowds cheered them as they marched [C]onfederate soldiers scarred by battle and defeat found great personal satisfaction in them" (196) と、兵士らが称賛を期待していたと説明する。しかし、ウィルソンは国家の統一をたたえながらも、兵士をほめたり、将官を神格化したりするようなことはなかった。軍人崇拝の傾向は当時の南部で顕著であったことを考えれば、ウィルソンは南部人なのに南部に批判的、と言われたりするのも理解できよう。それでは、彼にとって南部はさほど意味を持たなかったのだろうか。実際には、1912 年の大統領選に出馬した際は、南部出身であることを前面に押し出し、南部人から支援を受けて選挙運動を展開している。

改革派として知られ、実に多くの功績を遺した大統領にとって、南部出身であることがどのように作用したのか、歴史家として南部をどのように説明したのか、同じように南部から北部へ移住した南部人らが彼に何を託したのか、世紀転換期にウィルソンが発表した南部に関する論考、また南部にかかわる式典や晩餐会などでの演説から考察する。南部は国家再生のための手立てであり支えであった。

2. 南部人ウィルソン

ウィルソンの大統領就任を多くの人びとが南部復権の象徴と捉えた、と歴史

家の George B. Tindall は The Emergence of the New South 1913-1945 で述べている (1-2)。 就任式のパレードでは南軍の rebel yell が叫ばれ Dixie が演奏され,「南 部が50年を経てまたもや連邦を支配するようになった」と報じた新聞もあっ たという (Tindall 2)。確かに、南北戦争から半世紀を経てようやく選挙で選出 された南部出身の大統領は、多くの南部人を満足させた。彼らの期待通りに、 閣僚の半数を南部出身者が占めた。郵政長官の Albert S. Burleson (テキサス州の 出身), 財務長官の William Gibbs McAdoo (ジョージア州で生まれ, テネシー州で育 つ), 司法長官の James C. McReynolds (ケンタッキー州出身, テネシー州で弁護士), 海軍長官の Josephus Daniels (ノースカロライナ州出身), 農務長官の David F. Houston (ノースカロライナ州出身、テキサス大などで学長)、の5人である。

まさに南部の代表者に見えるウィルソンであるが、南部で生まれ育ったもの の両親は南部人ではなかった、保守的な南部を批判する革新派であった、南部 を去って北部で成功している、と指摘されたりもする。記念式典にしぶしぶと 参加したウィルソンは,もともと,戦没将兵記念日(Decoration Day)を祝うこ とに批判的だったようである。1881年5月にいとこ宛に以下のような手紙を 書いている。

I think that anything that tends to revive or perpetuate the bitter memories of the war is wicked folly. I would, of course, wish to see the graves of the Confederate soldiers kept in order with all loving care. But all the parade and speech-making, and sentimentality of "Decoration Day" are, I think, exceedingly unwise. (Papers of Woodrow Wilson 2: 64)

1年前に書いた論文 "John Bright" では、南部連合国が負けて良かったと明言 している。そして、もし南部が連邦離脱に成功していたとすれば、南部連合国 はアメリカ合衆国にはまったく敵わない国になってしまっていただろうと続け るのだった (Papers of Woodrow Wilson 1: 618)。 "[B] ecause I love the South, I rejoice in the failure of the Confederacy"というしばしば引用される文が含まれるこの論文 は、もともとヴァージニア大学で行った演説だった(当時はロースクールの学 生)。北部を擁護したジョン・ブライトが南部人の非難の的となっていたのに 対して、ウィルソンはあえて南部批判を試みるのだった (Bragdon 78)。また、

1886年にアメリカ史の授業を教える際に作成したノートには、南北戦争の理由が奴隷制度にあったこと("The fundamental cause was the radical differences about a condition between the 2 states . . . and the efficient cause of those differences was slavery"),そして州権を巡って南北で戦われたこと("The North and South fought because their differences and antagonisms had become intolerable and state sovereignty was made the formal basis of the war")が記されている(*Papers of Woodrow Wilson* 5: 352-356)。ここにはとくに南部(奴隷制度)擁護の姿勢はみられない。

ウッドロー・ウィルソンは、1856年ヴァージニア州スタントンで生まれ、 南北戦争中はジョージア州オーガスタ、南部再建期はサウスカロライナ州コロ ンビアで育った。1873年、16歳でノースカロライナ州シャーロット近郊にあ る Davidson College に入学し1年のみ通い、翌年は同州ウィルミントンに暮ら す家族のもとで過ごす。18歳のときに College of New Jersey (のちのプリンストン 大学) に入るため北部に向かう。卒業後、1879年22歳になったウィルソンは、 南部ヴァージニア大学のロースクールに入学している。1882年にはジョージ ア州アトランタで弁護士となり開業している。わずか1年で弁護士を辞め、 1883 年にはメリーランド州ボルチモアの Johns Hopkins 大学院に進学。そし て. 1885 年, ペンシルヴェニア州に創設されたばかりのブリンマー (Bryn Mawr College) で教職を得る。1888年にコネチカット州にあるウェズリアン (Wesleyan University), 1890 年には母校のプリンストンに移っている。1902 年からは同大 の学長を務め、1910年11月ニュージャージー州知事選挙に当選して政界入り する。このような略歴は、南部で大学教育を受け就職までするものの機会を求 めて北部へと移住し成功をおさめた多くの南部人の典型と言える。1880年以 降に南部から北部へ移住した人々を、Daniel E. Sutherland は移住の新しい波と 位置づけ、それ以前に移住した南部人はもっと若く、貧しく、北部に対する不 安もあった、と区別している(322)。

ウィルソンの書簡を編纂した Arthur S. Link の分析では、ウィルソンが「南部人」としてのアイデンティティを意識するのは 1890 年代半ばだった (8)。それまでは、北部出身でありながら南部の連邦離脱を支持した父親に宛てた書簡などでも、南部をたたえるような姿勢はみられない、とリンクは指摘する

(7)。リンクはまた、ウィルソンが大学に進学する頃には南部訛りを消していた、両親が中西部出身であり、祖先はスコットランド系アイルランド人、つまり「南部人」ではないことを強調していたという (11)。北部プリンストン大学で教鞭をとっていたころに南部を意識するようになったとするリンクに対して、ウィルソンの伝記を著した John Milton Cooper は、もっと早くから南部人としてのアイデンティティは明確だったとする。いくら南部訛りをなくしても北部人の友人から見れば、「南部人」であり「連邦離脱支持者」でしかなかったのだから、と指摘する (23)。南北戦争について語れば、南部を擁護し、敗北をいまいましく思っていた、負けを喫した貧しく恵まれない地域がそのアイデンティティの根底にあった、とクーパーは分析する (24)。

いつから南部人としての自覚を持ったのか正確に指摘するのは難しいが、ひとつ言えるのは、南部への思いが次第に強まったということである。とくに 1890 年代、1900 年代はその傾向が顕著だった。リンクが明示する 1890 年代半ばは、ウィルソンが歴史の論文や著書——当然ながら南北戦争について論じている——を書いていたときだった。そしてそれは、南部による南部の解釈が北部へ広まった時期でもあった。

3. 「南北戦争の解釈」

南北戦争の記憶は南部と北部では違う。歴史家の Alan T. Nolan は、このような違いを「歴史」と「神話」の違いとして説明する (11)。ゲインズ・M・フォスターは「神話」ではなく「南部の解釈」(4)、David Blight は「南部の文化」(258) として語っている。いずれにしても、戦後に形成されたこの南北戦争の目的や敗因の解釈を、歴史家は "Lost Cause" として扱っている。

このフレーズは、1866年に出版された Edward A. Pollard の The Lost Cause: The Standard Southern History of the War of the Confederates で最初に使われ、700頁を超えるこの大著は、南軍将校を英雄として描くことによって、勝てなかった南部の面目が失われないようにすることが目的だった。戦争直後から、戦争の意義を求め、敗戦による虚無感を打ち破ろうとする動きがあり、ポラードの著書は

そのひとつのあらわれだった。また、そういった考えは、戦後に創設されたさまざまな組織によって拡散された(Foster 4-5)。

そういった組織の1つ Southern Historical Society は1870年代に、Jubal A. Early など元南部連合国の指導者たちによって創設された。次世代へ正しい歴史が伝えられることを目指して Southern Historical Society Papers を刊行し、連邦離脱が合憲であったなど彼らの言うところの「真実」を伝えようとした。多くの論文も残しているジュバル・A・アーリーは、1866年末に A Memoir of the Last Year of the War for Independence, in the Confederate States of America を出版している。これは、南北戦争の回顧録として、また連合国幹部による回顧録として最初のものとされる。

アーリーによる戦争解釈は以下の3つのポイントに集約される。①ロバート・E・リー将軍は非常に優れた勇敢な将軍で、数的に劣った南軍をうまく率いた、②リーの率いた Army of Northern Virginia は戦争史に残る武勇を誇った、③戦いに負けたわけではなく、兵士の数や物資で劣っていたため、やむを得ずアポマトックスで戦うことをやめた。このような戦争の解釈を記録することによって、後の世代に、南軍が負けたけれども、それが勇敢な敗北であることを分かってもらえれば、というのが狙いだった。

『南部歴史協会編纂記録』では、上記のアーリーの3つのポイントに加えて、(現在ではあたりまえのように思われている)ヴァージニアがもっとも重要な戦場だった、という点も強調されている。Lost Cause を信憑性のない神話として一蹴するのが難しいのは、Gary W. Gallagher も指摘しているように、それが事実に基づいた解釈だったからである。つまり、確かにリーは南北戦争以前から優れた指揮官として知られ、南軍が兵士の数や物資の点で不利な状況にあったことは多く、当時の北部・南部・ヨーロッパの新聞はヴァージニアでの戦いを重要視していた(Gallagher 43)。

Lost Cause 普及の役割を果たしたのは、南部歴史協会だけではない。1889 年には南部退役兵士の組織 United Confederate Veterans (UCV) が結成された。1890 年代に会員を増やし、1903 年にはおよそ8万~8万5千人の元兵士が所属していたとフォスターは推測している(107)。さらに、United Daughters of the

Confederacy, Sons of Confederate Veterans も創設され (1896年), 各地の南軍兵士 の集会に積極的に関わっていた。

UCV の目的の1つに歴史教科書の書き換えがあったと歴史家 James M. McPherson は明らかにしている (64)。マクファソンによれば、UCV、UDC や、 SCV の集まり、式典やパレードなどのあらゆるところで子どもたちが参加し ていた。公教育が定着していった世紀転換期に、教科書会社の多くがリベラル な北部の会社であることが問題視された。南北戦争が奴隷制度を巡る戦いであ った、など「間違った」歴史が、南部白人の子どもたちに教え込まれてしまう のを阻止しなければならない、ということもあって UCV は設立された (McPherson 67)

UCV の歴史委員会は、①連邦離脱は反逆ではなく、法律で認められている 州権を行使しただけである.②南部は奴隷制度のためではなく自治のために戦 った. ③南軍兵士は勇敢に戦い、ほとんどの戦いに勝利することができたが、 相手側の兵士の数や物質的な力の優勢の前に屈せざるを得なかった(McPherson 68). という Lost Cause の解釈が教科書に盛り込まれるよう努力した。また. 南部でも教科書が出版されるようになり、Jabez L. M. Curry が編纂した The Southern States of the American Union (1894年), Susan Pendleton Lee によって書かれ た A School History of the United States (1895年) などが好評だったという。1910年 頃には UCV の目標は達成された、とマクファソンは述べている (70)。

組織と同じように重要だったのはさまざまな催しである。戦争終結直後か ら、兵士たちの再会の集い (reunion) が頻繁に行われていた。このような集い は兵士たちだけではなく、コミュニティにとっても、過去の記憶を共有し、地 元の兵士に敬意を表し、若い世代に戦争の歴史を伝えるうえで重要となる (Bohannon 89)。兵士たちのこのような集まりは部隊ごとに行われ、後で影響力 を持つようになった 1889 年創設の UCV よりもはやくに定着していた。再会 の集いでは、兵士たちの絆、ともにくぐった苦難、戦いのエピソードなどが語 られたが、脱走兵や敗北などについて触れられることはなかった。それぞれの 兵士がいかに勇敢に戦ったか、が強調されたのである (Foster 92-93)。

このような催しは南部内だけにとどまらず、例えば戦場で奪った旗を連邦軍

の退役軍人らに返却した、ということもあった(Bohannon 89)。1880年代には和解の風潮があった、とくに民主党の Grover Cleveland が大統領になり、北部メディアの南軍兵士の扱いが敬意を表するものに変わっていったから、と歴史家 Keith S. Bohannon は指摘している。ボーハナンによれば、1880年代から南部の代表団を北部の集いに送り、そして北部の部隊の代表団を招待する、ということが行われていた。参加した北部兵士は常に南軍兵士をたたえ南部人もまた北部の兵士に好意的だった。多くの南軍兵士は、南部連合国が戦ったのは州の権利を守るためだったと主張し、当然ながら奴隷制度と戦争を結びつけるようなことはしない。敗北についても、このような集いのスピーカーは、連邦軍の優位(兵士数)に負けたと説明した(Bohannon 96)。こうして、Lost Cause は、1880年代には北部の人びとも耳にする歴史認識となったのである。

南軍の George E. Pickett 将軍の妻 LaSalle Corbell Pickett は人気作家であるばかりでなく、さまざまな退役軍人の集い、記念碑の除幕式、パレードなどに参加し、「南部神話」を広めている(Gordon 170)。すべて真実を書いていると主張するラサールの作品にはリー、ジャクソン、ピケット、デイヴィスなど南軍の将軍が多く登場するが、描かれているのは、いわゆるプランテーション小説にみられる、親切な主人、誇り高き高潔な人びと、奴隷は白人に忠実、といった理想化した旧南部だった。南部が連邦を離脱したのは奴隷制度とは無関係、離脱は正当な権利、南軍兵士は勇敢だった(Gordon 174-175)、となると、これはLost Cause のプロパガンダと言える。ラサールの Pickett and His Men(1899年)、Bugles of Gettysburg(1913年)などの作品は北部でも人気を得ており、全国で行った講演も好評だったという(Gordon 177)。

1880~1890 年代にかけて南部以外でも耳にするようになったと言われる Lost Cause は、集会や講演、小説などを通じても広まっていった。それが、北 部に移住していたウィルソンら南部人たちにも影響を与えたと考えられる。

4. ウィルソンと南部の歴史

ウィルソンは南北戦争の記憶について語ったことがほとんどない。ウィルソ

ンの伝記によれば、最初の記憶は、通りがかりの人が「リンカンが当選した、 戦争になるぞ」と言うのを聞いて、家のなかに駆け込んで父親にそれがどうい うことなのか聞いたというものだった (Cooper 16)。戦争中オーガスタに住ん でいたウィルソンが、南北戦争にまったく触れなかったはずはなく、1863年 には父親の教会が南部連合の野戦病院となり、その敷地は北軍兵の捕虜を留置 する場となったため、両方の兵士を目の当たりにしていたはずだったが、その 体験を披露することはなかった (Cooper 17-18)。

しかし、論文や著書では南北戦争を論じている。ここではとくに、1890年 代に著書 Division and Reunion, 1829-1889 (1893年) を含め、Review of Reviews, Forum, Atlantic Monthly などさまざまな雑誌に寄稿して南部の歴史を説明して いる (Cooper 73-74) ことに注目する。『分裂と再結合』は出版社の督促を受け ながらも慎重に書きあげたものだった。1893年に出版されると、南部の連邦 離脱の再解釈として注目を浴び、新聞や雑誌に書評が掲載された。クーパーに よれば、歴史書としては大ざっぱであったものの書評は概ね良かった (73)。 南部擁護の解釈を Frederick Bancroft などの歴史家は問題視したが、ウィルソン は北部人研究者らの南部批判に反論している (Bragdon 240)。ウィルソンの解釈 は、北部と南部が経済的に異なる発展をしたため、その違いから戦争に発展し た. というものだった。また、南部の連邦離脱 (州権護持) は違憲ではなかっ たとし、奴隷制度についても奴隷売買など嫌悪すべき点はあるものの概して 「慈悲深い」ものだったと擁護している。

ウィルソンが深く歴史を学んだわけではなく、プリンストン大学に移って以 降, 歴史の授業を教えていないことから, Henry Wilkinson Bragdon は, "[A]s a political philosopher it was his habit to look for the larger meaning, to generalize; he lacked sufficient feeling for the incidental, the unique, and the concrete. Thus, he did not write history, but about history"と歴史書として不十分ではないかと疑問視する (232)。 すでに知られている出来事を彼なりに解釈しながら紡ぐことによって過去を明 らかにしていく、というウィルソンの書き方が、膨大な資料を収集・分析しな から書く歴史とは違うという批判もあろう。しかし、その真偽はともかく、北 部有数の大学で教鞭をとるウィルソンの影響は計り知れない。

Atlantic Monthly 誌の 1897 年 7 月号に掲載された "The Making of the Nation" では、南北戦争は避けられなかったと説明する。

There was war between the South and the rest of the nation because their differences were removable in no other way. There was no prospect that slavery, the root of those differences, would ever disappear in the mere process of growth. It was to be apprehended, on the contrary, that the very processes of growth would inevitably lead to the extension of slavery and the perpetuation of radical social and economic contrasts and antagonisms between State and State, between region and region. (Essential Writings 168–169)

また、1899年に書いた "State Rights (1850–1861)" (Cambridge Modern History の第7巻 The United States の1章分を依頼されて執筆している) でも、奴隷制度廃止論者らの悪意のある南部批判を糾弾し、州権、連邦離脱が憲法に適ったものであったと論じている。そして最後に以下のように結ぶ。

The South fought for a principle, as the North did: it was this that was to give the war dignity, and supply the tragedy with a double motive. But the principle of which the South fought meant standstill in the midst of change; it was conservative, not creative; it was against drift and destiny . . . Overwhelming material superiority, it turned out, was with the North; but she had also another and greater advantage: she was to fight for the Union and for the abiding peace, concord, and strength of a great nation. (Essential Writings 202)

南部は州の権利を守るために戦った、数的に不利であったために負けたとする Lost Cause の解釈と重なる。

5巻からなる大著 A History of the American People (1901年)では、南北戦争に至る過程の説明で、いかに奴隷制度を非難する北部の声が南部人の感情を逆撫でしていたかを強調している (4:192)。植民地時代には国王から奴隷制度を押しつけられ、独立後は北部が奴隷制度を廃止するにあたって不要となった奴隷が南部に売りつけられ、やがて南部に数百万の奴隷が集中するようになってしまった、と書くように、ウィルソンは南部だけを非難する風潮を批判する (4:193-194)。また、南部人のすべてが奴隷を所有していたわけではない、自営農もいて奴隷をまったく使わない、あるいは借りた奴隷数名とともに畑を耕して

いた,奴隷所有者らは責任をもって奴隷たちに対処していた,など説明する(4:194)。

連邦離脱についても、それぞれの州が自分たちの意思で連邦に参加しているのだから、離脱するのは自由であるはずだった、と書く(4:208)。リー将軍の描写は、もともと優れた将校であった、独立革命で活躍した父を持ち、南部の紳士、信念の人だった、など賛美に近かった。敗戦の理由も数的に劣勢であったことに見出している(4:254)。このようにウィルソンの南北戦争解釈にはLost Cause の影響が色濃い(実際に、参考にした図書として Pollard の Lost Cause が挙がっている)。

しかし、注目すべき点もある。過去にとらわれず新しい国家の可能性を強調しているところである。Gary Gerstle も、ウィルソンの歴史書が「アメリカ国家創生」のテーマに沿って書かれていると指摘する(97)。戦争は国家のために必要であったとウィルソンは説く。20世紀に入って催される南北戦争関連の式典でスピーチを依頼されるウィルソンは、南部の神話に再生のテーマを織り込んでいく。

例えば1909年、ウィルソンはノースカロライナ大学に招かれ、講演を行っている。冒頭で、地域に根ざしてこそ愛国心も生まれる、南部をアメリカのアイデンティティの拠りどころにするように、と訴えた("Robert E. Lee" 322)。そして、講演のテーマであったリー将軍についても、「再結合」の象徴、国民的英雄として語る。

"This man was not great because he was born of a soldier and bred in a school of soldiers, but because, of whomsoever he may have been born, howsoever he was bred, he was man who saw his duty, who conceived it in high terms, and who spent himself, not upon his own ambitions, but in the duty that lay before him." ("Robert E. Lee" 322)

リー将軍を語るうえでは通常欠かせない武功についてはまったく触れず、彼の 生き方から学ぶよう訴える。そう言いながらも、過去は振り返るものではな い、それよりも未来を見据えて前進すべき、というウィルソンのいつものメッ セージが中心となっている。 1910年のニューヨーク南部人協会主催の晩餐会には、800人強が集い、「懐かしきケンタッキーの我が家」、続いて「ディクシー」が合唱された。南部料理の並ぶメニューにあしらわれているのは、マミーのイメージだった。晩餐会はいつもアメリカ合衆国大統領に対する乾杯で始まるが、この年はWilliam Howard Taft 大統領が南部人を連邦最高裁主任判事に任命したこともあって、割れるような拍手だったという("Southern Society Cheers for Taft")。司会を務めたのは協会の会長ウィリアム・G・マカドゥー(当時ハドソン・マンハッタン鉄道社長)、そしてその両脇にはニューヨーク州知事に当選した John A. Dix と、ニュージャージー州知事に当選したばかりのウィルソンがいた。南部人の集いでありながら連邦も強く意識していることは、来賓に迎えられるのが北部(アメリカ合衆国)で成功している人物であったことからわかろう。

晩餐会のゲスト・スピーカーであったウィルソンは、南北のセクショナリズムが完全になくなることを訴えたあとで、南部の結束をたたえ、そしてその南部が国家にいかに貢献してきたか、また今後貢献しうるのか話し、地域と国家の結びつきを、"'It happens that the particular problem of the present is to express National purposes in action without loss of local vitality. It is to embody local individualism with National energy," と強調している("Southern Society Cheers for Taft")。

1912年12月に催された晩餐会にもウィルソンはゲストとして招かれている。すでに大統領選に勝利して1月の就任式を待つばかりのときだった。ここでも南北戦争に触れている。もともと経済的なシステムとしては好ましいものではなかったと説明したうえで、奴隷制度を擁護するための戦いではなかった、そうではなく自分たちの権利を守りたい、という南部人の不撓不屈の精神のあらわれだった、と述べる("Gov. Wilson Outlines Work Ahead of Him")。あからさまな Lost Cause 提唱はみられないが、ウィルソンの描く南部は南北戦争によって定義づけられ、また、この戦争によって新しいアメリカが可能になったと説明するのである。

スピーチではさらに移住の重要性を述べている。自身の体験をもとに、1つのところにとどまっていたら、偏狭な人間になっていただろう、ほかの考え方

を持ったさまざまな人に出会うことによって相手のことが理解できるようにな った、と語った。そして、集まっている人びとに向かって、"You have imported the thought of another part of the country into this great port into which so many things are imported. You have imported the thought of the South into New York" (Papers of Woodrow Wilson 25: 595), と彼らがニューヨークに「南部の考え方」をもたらした ことを称賛する。また、「南部」とは何を意味するのか説明を試みた。

"The South is an idea with most Southerners, and I have sometimes asked myself, as a Southerner, What is the idea? I find that some people think that America was settled at the time the Puritans came over, but it was settled several years before that in a colony known as Virginia. And when the American Revolution came on, Virginia showed this singular characteristic: She was willing to fight for something that had nothing to do with her own interests." (Papers of Woodrow Wilson 25: 596)

あたかも南部は建国当時から国家の「犠牲」となってきたかのように語る。

ウィルソンが50周年の式典に出席したのは、この半年後のことだった。ゲ ティスバーグでのウィルソンの演説は、内戦によってより良い国になったとい う趣旨だった (Essential Writings 370)。数目に及ぶ式典は、企画者らによって「平 和 50 年祭 (Peace Jubilee)」と名づけられていたが――イベントのクライマック スは元南軍兵士が鬨の声を上げながら戦場に駆け込み、それを元北軍兵士らが 握手で出迎えるという場面だった――、南北の和解が強調され、戦争の記憶は 無難なものと化し、戦後の南部再建については触れられない。奴隷解放につい て語ることもなければ黒人の元兵士の参加を認めない、白人ばかりが集う式典 は、歴史家のブライトに言わせれば「ジム・クロウの集い(Jim Crow reunion)」 となる (9)。実際, 1913年と言えば、隔離政策が定着していたばかりでなく、 多くの州でアフリカ系アメリカ人の投票が困難になり (事実上の剝奪), またリ ンチなどの暴力も後を絶たない、まさに暗黒の時代だった。ブライトは、"By the turn of the century, the Lost Cause (as cultural practice and as a set of arguments) served two aims—reconciliation and Southern partisanship", と Lost Cause は二重の役割を 果たしていると分析する(258)。19世紀末には「南部の解釈」が「アメリカの

解釈」になり、20世紀にはこの南北の和解 (reconciliation) とともに南部人としての意識 (partisanship) を形成した。事実、1908 年頃から南部 (の性質) をアメリカ人の拠りどころ (根拠) にしようとする意識が目立つようになる。ウィルソンが 50 周年の式典で訴えたのもまさにそういったことだった。

1890 年代にウィルソンは歴史書を書き新しい国家の解釈を定着させ,1900 年代にはスピーチなどで過去ではなく未来を重視し,その新しい国家の基盤と して南部を位置づけるのだった。

5. ニューヨーク南部人協会

1912年にウィルソンが大統領選挙に勝利した際は、南部の勝利とみられた。 実際、多くの南部人が選挙戦を後援していた。大統領候補として名前が挙がる ようになったのは、ニュージャージー州知事に当選してすぐのことで、ウィル ソンが大統領選挙に出馬することを積極的に支援したのは、彼と同じように、 南部出身で北部で成功していた3人だった(Cooper 141)。故郷のノースカロラ イナ州を離れニューヨークで雑誌や出版社の編集者として活躍していたWalter Hines Page、当時ニューヨーク南部人協会(New York Southern Society)の会長を務 めていたヴァージニア出身の弁護士Walter McCorkle、そしてアーカンソー出 身でウィルソンのプリンストン時代の学生であり、やはりニューヨークで弁護 士を開業していたWilliam F. McCombs である。

このような南部移住者が集う組織が北部には存在し、そのうちの1つが、ウィルソンが何度かゲストとしてスピーチをしていたニューヨーク南部人協会である。毎年、晩餐会などの催しを企画し、ニューヨークに住む南部人に社交の場を提供していた。1887年に開催された最初の晩餐会で初代会長のAlgernon Sydney Sullivan が強調するのは、南北の和解がすでに実現しているということだった。

"It is twenty-two years since war ended between the Union and the Confederacy, and now we have perfect peace. Indeed, there is almost rivalry in a common patriotic enthusiasm between these recent foes. Even the ashes from once-glowing embers have been scattered by the merciful

winds, and we find not a spark of burnings or hate." (Holmes 226)

協会は 1886年 11 月に発足している。サリヴァンの伝記には、初代大統領ジョ ージ・ワシントン (ヴァージニア出身) をたたえるのをその目的とし、毎年晩餐 会はワシントンの誕生日に開催すると決定した、とある (Holmes 228)。また、 創設当時の新聞記事を読むと、以下の特徴が浮かびあがってくる。ニューヨー クに既存の New England Society を真似たエリートの集う社交クラブとして考案 されたこと、ニューヨーク在住の南部出身者だけでなく北部の名士も催しに招 待されていたこと (和解の象徴). そして南部人の著作を集めた図書室をつくり 雑誌の編集者をゲストに呼ぶなど文化的な側面があったこと("Professional Clubs"; "City and Suburban News"; "The Southern Society"; "Valuable Collection of Books") 北部に移住した南部人に親睦の場を提供する協会は、南部を懐かしむことはあ ってもほめたたえることはなかった。

1892 年の晩餐会では 200 名の聴衆を前にマサチューセッツ州知事 William E. Russell が演説を行い、ジョージ・ワシントンに言及しながら、統一した国家を 謳った("North and South Are One")。ゲスト・スピーカーとしてほかにも,地元 ニューヨークの共和党保守の有力者 Elihu Root 地方検事(後にマッキンリー政権 で陸軍長官、ローズヴェルト政権で国務長官)が、南部ノースカロライナ州選出の 下院議員で民主党保守の Alfred Moore Waddell とともに名を連ねていた。晩餐 会では "I'se Gwine Back to Dixie" や "Old Folks at Home" などの南部の歌が合唱 されたものの、来賓やスピーチからは南北統一のメッセージが明らかだった。

8回目となる 1894 年の晩餐会では多くの南部人連邦議員がスピーチを行っ ている ("The Social World")。ケンタッキー州選出の John G. Carlisle はこの時に はクリーヴランド大統領に財務長官に任命されていた。Charles F. Crisp もカー ライルと同じく民主党保守で、ジョージア州選出の議員だった。1891年に下 院議会の議長に選出されている。弁護士でもある Isidor Reyner はメリーランド 選出の下院議員,John Mills Allen はミシシッピ州選出の民主党下院議員であ る。南北の和解について語る場合に(本稿でもそうしたように)集会や講演、小 説などの文化的な側面に注目することが多い。しかし、政治の場でも南部人の 再編入が進んでいた。1877年に連邦軍が撤退すると同時に南部民主党の復権は始まったとされる。しかし、ここで忘れてはならないのは、共和党はリンカンの政党、奴隷解放の政党、黒人議員容認(「支配」だと南部白人は憤った)の政党、といったイメージがつきまとい、南部は民主党の一党支配になってしまっていた点である。風通しの悪い、改革を拒むような政治は、南部の遅れたイメージを助長した。南部政治の復権というにはほど遠かった。南部政治家は多くいたものの、彼らが国家の中心というわけではなかったのである。

このような状況に変化の兆しがみられたのは、1898年の米西戦争の頃からだった。ハバナ港で戦艦メイン号が爆沈したのはこの年の晩餐会が開かれたわずか1週間前の2月15日だった。当然ながらスピーチではこの事件について触れられていた。静観を訴えるものもあれば、ケンタッキー州のWilliam Lindsay 知事のように過激なものもある。元南軍兵士で、地元で弁護士、判事を務めたのちに政界入りしているリンジーは、南部がアメリカの表舞台に復帰する機会だとして南部人聴衆を鼓舞した。かつてのアメリカがそうであったように完全な平等を実現しよう、というのである。

"The field of National politics is to-day open, and the conditions demand that Southern statesmanship shall make itself felt, not merely in the affairs of the South, but in all that affects the common interest of our common country The people of the South are essentially American. The mission lies before the South to call back this Government to the ancient standards. The time has come for her to assert her absolute equality in the council chamber"

("Southern Society Dinner: Senator Lindsay")

政治の場での南部復権を求める声は、新しい世紀の到来とともに強まった。20世紀に入ると、南部人協会と同様の趣旨をもった社交クラブがいくつも創設され、例えば同じ人物が複数に所属することもあり、また、ニューヨーク南部人協会の晩餐会に New England Society, Ohio Society, Pennsylvania Society, Maryland Society, North Carolina Society, Confederate Veteran's Camp など、ほかの組織の会長が招待されていた。ゲスト・スピーカーとして複数の会に呼ばれる人もいる。同じような主張がどこでも聞かれるようになれば浸透も早い。統合

された南北のイメージから南部の政治復権のアピールへとメッセージは変わっ ていく。

1903 年の Unitarian Club の月例会には 3 人の南部人がそれぞれ "The South As It Was," "The South As It Is," "The South As It Is to Be" のタイトルでスピーチをし ている。最後のスピーカーは、当時ニューヨークで全国的に影響力のある雑誌 World's Work を編集発行していたペイジだった。ウィルソン大統領誕生実現に 尽力した1人である。ペイジは南部の黒人人口が増えていることを挙げて、そ のため読み書きができない黒人も増えている、とする。そして、彼らから投票 権を奪うことは、南部の政治が機能するようになることを意味する、と主張し た。投票権剝奪をまだ導入していない州についてもいずれそうするだろう、と 結んでいる ("The Negro in the South")。ペイジは同じスピーチで, "I would have established the same binding voting qualifications for whites and blacks alike" というよ うに、必ずしも人種に基づいた投票権剝奪を求めているわけではなかったもの の、実際にはそうなっていることにとくに反対はしていない。北部に住む南部 人の親睦の場であった社交クラブでは次第に、南部の戦争解釈とはまた別の、 新しい南部の主張が聞かれるようになった。

ニューヨーク南部人協会も会員が増えるにつれて南部色が強まっていき。南 北の一致よりも南部の特質が重要視されていくかのようだった。

6. 南部の政治(家)

19世紀末の南部人北部移住者を、ダニエル・E・サザランドの The Confederate Carpetbaggers では、世代で区切って論じている。 Confederate Veteran Camp (CVC) of New York に所属するような元南軍兵士世代と、その子どもたち及び戦争中 はまだ幼く戦後の南部である程度の教育を受けてから北部移住した世代であ る。サザランドがおもに取り上げているのは前者であり、南部の心を持ちなが らも北部に移りそこを生活の拠点にしていった人たち、北部人に向かって南部 を語り Lost Cause を理解してもらおうとした世代である (321)。次の世代は、 1880年以降それなりに南部で成功してから移住している。とサザランドは指 摘する(322)。彼らは、南部連合国ではなく、南北の和解とニューサウスを提唱する。新しい世代の移住者らは、国家のなかでの南部の位置づけを意識していた。代表的な1人として、サザランドは上記のペイジを挙げている。

南北戦争後の20年間は、民主党でない南部政治家は排斥された。そのため、ソリッドサウスが南部の政治家をダメにしてしまう、とペイジのように危機感を持つ南部人も少なくなかった。対立する政党に対しては嫌悪感を抱くのみで、政治的な欺瞞・不正も見て見ぬふりをする。こういった一党支配によって、南部の偏狭は助長され、新聞などのマスコミも片方に偏りすぎてしまうと懸念した。

ペイジの手紙を編纂した Burton J. Hendrick によれば、20 代半ばの駆け出し記者の頃、ペイジは、弁護士業を開業したばかりのウィルソンとアトランタで出会っている。それ以降 2 人は、親密とまではいかなくとも手紙のやりとりをする良好な関係を保っていた。『フォーラム』や『アトランティック・マンスリー』などで編集長を務めるようになると、ペイジはウィルソンに原稿を依頼することもあり、またウィルソンはプリンストン大学の学長に就任した後も悩みをペイジに相談することもあった。ペイジがウィルソンに絶大な信頼を寄せていたのは(大統領に推したのは)、その知性に惹かれたからだった、とヘンドリックは述べている(3-4)。ペイジは、ウィルソン同様「停滞した」南部から「知的刺激」を求めて北部へ移住している。

ペイジは 1908 年 12 月に、南部のなかでもノースカロライナ州出身者だけを会員とする North Carolina Society of New York の晩餐会で次期大統領に当選したばかりのウィリアム・タフトを紹介するスピーチを行っている。 "The South and the National Government" と題されたタフトのスピーチは冊子として出版され、ペイジのスピーチ "The Solid South" も収録されている。一党支配のソリッドサウスに批判的なペイジは、1908 年の選挙で同様の現象が北部で起こっていることに懸念を示す。 "Where one party has too long and secure power it becomes intolerant and the other party falls into contempt. Thus these states have become stagnant or corrupt"と訴え、北部でも南部でも一党支配に陥ってしまうと政治が機能せず、なれ合いや汚職が蔓延してしまうと指摘する(5)。そして、南部

人が国家の政治に関わっていないことを憂い、最後には聴衆に向かって政党に とらわれずに政治参加することを呼びかけ、タフトを紹介するのだった。

タフトのスピーチもまた、ソリッドサウスの問題について触れ、この地域で かつての(二大) 政党システムが機能するようになることを願うものだった。 南部について語るタフトは、奴隷制度が好ましくない制度であったことは誰も が認めることであるし、すでに制度は廃止されているため、いまさら過去の責 任について議論をしても仕方がないとする (10)。そして、戦後の憲法修正に より、解放奴隷には自由と市民権と政治参加が約束されたことによって問題が 生じたことについて述べ(南部白人がいうところの「黒人支配」が実際にあったかの ようにほのめかす)、人種に基づいた投票権の制限もやむを得ないという態度を 明らかにする (10-11)。 "The Federal Government has nothing to do with social equality. The war amendments do not declare in favor of social equality . . . Social equality is something that grows out of voluntary concessions by the individuals forming society" (12) と説明するに至っては、南部民主党の政治家の思想をそのまま反映して いるかのような、共和党大統領による発言ではないか。北部共和党の政治家で すら、南部の新しい主張を共有しているようだった。投票権剝奪によって政治 が機能するようになるということだとすれば、黒人有権者の犠牲のうえに国家 の再生は可能になるということだろう。

南部連合国や南軍兵士をたたえることは南部再生に役立つものの、南部に自 信をもたらすような記憶は白人優越主義に支柱を与えてしまう、とフォスター は述べている(194)。元兵士らの集いでは従順な奴隷について語られるばかり でなく、忠実な黒人が登場して「理想的な黒人」の姿がいかなるものかを示す ――つまり、隔離政策や投票権剝奪を正当化する、というのである (Foster 194)

ニューヨーク南部人協会は,1934 年に会員 Hugh Gordon Miller によるラジオ 講演を企画し、その12回分を1冊の本にまとめて出版している。序文を書い た Percy H. Johnston は, "The South today forms but one component and concordant part of a new homogenous whole. But the best of the old influences still survive, and will

アメリカにとって南部が不可欠というばかりでなく、国家の形成において重要な役割を果たした、つまり南部人がそのままアメリカの人格に反映されていると主張した。ラジオ番組は南部出身の12人の大統領¹⁾を扱ったものだった。

ミラーによれば、もともと南部人協会は政治に関わるつもりはなかった。ところが、1911年には会員の多くがウィルソンを支援するようになった、と説明している。

[I]n 1911, leading members of the Society, unofficially, and as individuals, furnished the initial funds necessary for the propaganda in favor of Wilson's nomination for President. The group included Wm. G. McAdoo, then President of the Society, who become Secretary of the Treasury, Walter L. McCorkle and George Gordon Battle who became Presidents of the Society, Stuart G. Gibboney, now President of the Thomas Jefferson Foundation, and then Secretary of this Society, and Wm. F. McCombs, then Treasurer of the Society, who became Chairman of his party. All were distinguished lawyers, educated in the South under the great tradition of public service, which this Society is proud to perpetuate and record.

会長を務めた人びとがこれだけ名を連ねていれば、協会とは無関係とは言い難い。明らかに彼らは南部人の大統領を渇望し、とくに彼らと同じく南部から北部に移住しさまざまな経験を重ね、そして彼らと同じように公共心に富み改革を通じて国家の再生を目指す、そんなウィルソンが指導者となることを強く望んだのであった。協会の会員の1人であったペイジがそう明言していたように、彼らが願うのは政治の腐敗をなくすことであった。そして、そのためには投票権剝奪はやむを得ないことになる。

元兵士の集いで人種隔離が肯定され、歴史書では奴隷制度(の時代)が容認され、エリートの集う晩餐会では投票権剝奪が弁護される。国家再生を謳う南部復権が意味するのは、けっきょくは人種差別政策に立脚したかつての国家への逆戻りに過ぎなかったと言えよう。

7. おわりに

1917年に南軍の退役軍人は初めて南部以外の場所で再会の集いを開催した (Charles Wilson 179)。首都ワシントンである。この南部の式典でスピーチをした ウィルソン大統領は、記憶と忘却の大切さを訴えた。

"There are many memories of the Civil War that thrill along the blood and make one proud to have been sprung of a race that could produce such bravery and constancy. And yet the world does not live on memories. The world is constantly making its toilsome way forward into new and different days, and I believe that one of the things that contributes satisfaction to a reunion like this, and a welcome like this, is that this is also a day of oblivion." (Woodrow Wilson Papers 42: 451)

未来を見据えた漠然とした演説はウィルソンらしいものだが、忘れることによ って再生が可能になると訴え、最後に reunion を renewal と結びつけてスピーチ を終えている。 "And so it seems to me that we may regard this as a very happy day, because a day of reunion, a day of noble memories, a day of dedication, a day of the renewal of the spirit which has made America great among the peoples of the world" (Woodrow Wilson Papers 42: 453).

南北の和解は2つの側面から語ることができる。文化的な和解は1890年代 には完了したとされ、ところが20世紀に入っても南部人の復権を求める声は 消えていなかった。これは、政治的な復権を求めるもので、南部をアメリカ政 治の中枢に「戻す」(南部人はジョージ・ワシントンら建国の父祖らの時代を懐かし む)ことが望まれた。その願いはウィルソン大統領の登場で実現するが、その ような南部優越を訴える国家の再建は、人種差別的なアメリカの再生へと繋が ってしまう。北部に移住した南部人たちの南部志向は、アメリカ全体を南部傾 倒へと導き、それは排他的な国を意味した。

ウィルソンをはじめ、南部の停滞感に押し出される形で北部に移住した人び とが移住先で見出したのは、南部に裏打ちされたアメリカらしさだった。国家 再生には犠牲を伴うと訴えたウィルソンだったが――彼によれば南部(人)が その犠牲となった――, 実は最大の犠牲者がアメリカ黒人であったことは意識 していたのだろうか。

注

 George Washington, Thomas Jefferson, James Madison, James Monroe, Andrew Jackson, William Henry Harrison, John Tyler, James K. Polk, Zachary Taylor, Abraham Lincoln, Andrew Johnson, Woodrow Wilson.

参考文献

- Blight, David W. *Race and Reunion: The Civil War in American Memory*. Cambridge, MA: Belknap Press of Harvard University, 2001. Print.
- Bohannon, Keith S. "'These Few Gray-Haired Battle-Scarred Veterans': Confederate Army Reunions in Georgia, 1886–95." *The Myth of the Lost Cause and Civil War History*. Ed. Gary W. Gallagher and Alan T. Nolan. Bloomington: Indiana University Press, 2000. 89–110. Print.
- Bragdon, Henry Wilkinson. Woodrow Wilson: The Academic Years. Cambridge, MA: Belknap Press, 1967. Print.
- "City and Suburban News: New York." New York Times 12 May 1887: 2. ProQuest Historical Newspapers. Web.
- Cooper, John Milton. Woodrow Wilson: A Biography. New York: Vintage Books, 2009. Print.
- Foster, Gaines M. Ghosts of the Confederacy: Defeat, the Lost Cause, and the Emergence of the New South 1865 to 1913. New York: Oxford University Press, 1987. Print.
- Gallagher, Gary W. "Jubal A. Early, the Lost Cause, and Civil War History—A Persistent Legacy." *The Myth of the Lost Cause and Civil War History.* Ed. Gary W. Gallagher and Alan T. Nolan. Bloomington: Indiana University Press, 2000. 35–59. Print.
- Gerstle, Gary. "Race and Nation in the Thought and Politics of Woodrow Wilson." *Reconsidering Woodrow Wilson: Progressivism, Internationalism, War and Peace*. Ed. John Milton Cooper, Jr. Baltimore: Johns Hopkins University Press, 2008. 93–123. Print.
- "Gettysburg Cold to Wilson's Speech." New York Times 5 July 1913: 1. ProQuest Historical Newspapers. Web.
- Gordon, Lesley J. "'Let the People See the Old Life as It Was': LaSalle Corbell Pickett and the Myth of the Lost Cause." *The Myth of the Lost Cause and Civil War History*. Ed. Gary W. Gallagher and Alan T. Nolan. Bloomington: Indiana University Press, 2000. 170–184. Print.

- "Gov. Wilson Outlines Work Ahead of Him." New York Times 18 December 1912: 1. ProQuest Historical Newspapers. Web.
- Hendrick, Burton J. The Life and Letters of Walter H. Page. Volume III. New York: Doubleday, Page, 1925. Print.
- Holmes, Anne Middleton. Algernon Sydney Sullivan. New York: New York Southern Society,
- Johnston, Percy H. Introduction. Presidents Born in the South (Radio Addresses). New York: New York Southern Society, 1934. n. pag. Print.
- Link, Arthur S. "Woodrow Wilson: The American as Southerner." Journal of Southern History 36:1 (February 1970): 3-17. JSTOR. Web. 12 August 2014.
- McPherson, James M. "Long-Legged Yankee Lies: The Southern Textbook Crusade." The Memory of the Civil War in American Culture. Ed. Alice Fahs and Joan Waugh. Chapel Hill: University of North Carolina Press, 2005. 64-78. Print.
- Miller, Hugh Gordon. Presidents Born in the South (Radio Addresses). New York: New York Southern Society, 1934. Print.
- "Mr. Wilson at Gettysburg." New York Times 5 July 1913: 8. ProQuest Historical Newspapers. Web.
- "The Negro in the South: Walter Page Predicts an Ultimate Lowland Black Belt." New York Times 19 March 1903: 2. ProQuest Historical Newspapers. Web.
- Nolan, Alan T. "The Anatomy of the Myth." The Myth of the Lost Cause and Civil War History. Ed. Gary W. Gallagher and Alan T. Nolan. Bloomington: Indiana University Press, 2000. 11-34. Print.
- "North and South Are One: United Again at the Southern Society's Banquet." New York Times 23 February 1892: 2. ProQuest Historical Newspapers. Web.
- Page, Walter Hines. "The Solid South: Address by Mr. Walter H. Page." The South and the National Government. An Address Delivered at the Dinner of the North Carolina Society of New York, at the Hotel Astor, 7 December 1908: 5-7. Print.
- Pollard, Edward A. The Lost Cause; A New Southern History of the War of the Confederates. New York: E. B. Treat, 1866. Reprint.
- "The Professional Clubs: Influences of Outsiders on the Management." New York Times 10 January 1887: 2. ProQuest Historical Newspapers. Web.
- "The Southern Society." New York Times 11 May 1888: 2. ProQuest Historical Newspapers. Web.
- "Southern Society Cheers for Taft." New York Times 15 December 1910: 2. ProQuest Historical Newspapers. Web.
- "Southern Society Dinner: Senator Lindsay Says the Time Has Come for the South to Assert

- Herself." New York Times 23 February 1898: 2. ProQuest Historical Newspapers. Web.
- "Southern Society Dinner: Woodrow Wilson and Martin W. Littleton Talk on Democracy." New York Times 10 December, 1908: 6. ProQuest Historical Newspapers. Web.
- Sutherland, Daniel E. The Confederate Carpetbaggers. Baton Rouge: Louisiana State University Press. 1988. Print.
- Taft, William Howard. *The South and the National Government*. An Address Delivered at the Dinner of the North Carolina Society of New York, at the Hotel Astor, 7 December 1908. Print.
- Tindall, George B. *The Emergence of the New South 1913–1945*. Baton Rouge: Louisiana State University Press, 1967. Print.
- "Valuable Collection of Books." New York Times 8 December 1889: 16. ProQuest Historical Newspapers. Web.
- Wilson, Charles Raegan. *Baptized in Blood: The Religion of the Lost Cause, 1865–1920.* Athens, GA: University of Georgia Press, 1980. Print.
- Wilson, Woodrow. *Division and Reunion, 1829–1889*. New York: Longmans, Green, 1893. Print.
- ---. A History of the American People. 5 vols. New York: Harper & Brothers, 1901. Print.
- —. The Papers of Woodrow Wilson. Ed. Arthur S. Link. 69 vols. Princeton, NJ: Princeton University Press, 1966–1994. Print.
- —. "Robert E. Lee: An Interpretation." *Journal of Social Forces* 2. 3 (March 1924): 321–328. *JSTOR*. Web. 13 August 2014.
- —. Woodrow Wilson: Essential Writings and Speeches of Scholar-President. Ed. Mario R. DiNunzio. New York: New York University Press, 2006. Print.